

30周年記念シンポジウム

未来をつむぐ 親の会

子ども達の今とこれから」



幼児期

パネリスト 境谷 美智子
(町保健課長)



最近、出産して初めて赤ちゃんに触るという母親が半数以上いる。日常生活で赤ちゃんに触れる機会が減っている。そういうお母さん達と最初に関わるのが町の保健師だと心がけている。

これまでは、子どもの成長発達についての支援が中心だったが、最近は、生活支援・家族支援を含めた内容に変わっている。母親と子どもの関係、生活の様子など疑問に答え、母親の気持ちに寄り添える心を持ち、そういう場を提供していくことを大切にしている。



トが報告した一部を紹介します。

幕別町ことばを育てる親の会が発足30周年を迎え、それぞれのかかわりの糸をこれからもつむいでいきたいという願いを込めて、記念のシンポジウムを開催しました。

現在、親の会に関わっている方、過去に関わった方が集まり、和やかな雰囲気の中、パネルディスカッションを行い、その後、3つのグループに別れての座談会で活発に意見交換が行われました。

パネルディスカッションでは、札内南小学校の金曾奈穂美先生が進行役となり、幼児期から就労までの各分野のパネリストが、それぞれの段階ごとに支援の実態などを報告、それぞれの現場で感じていることを語りました。パネルディスカッションで、5人のパネリストが報告した一部を紹介します。

中学校期

パネリスト 神蔵 葉子
(札内東中学校教諭)



中学校では求められていることが格段に増えます。発達障がいを抱えている生徒は成長がゆるやかなので、まわりの生徒と差が広がっていきます。中学校に入って不応を起し発達障がいと気づくこともあります。

中学校にならないと気づけないということもあるかと思います。中学生になると自我ははっきりしてきます。授業に行けないという意思表示をする場合もあります。わからない授業をただ黙って座ってき聞いているのはつらいもの。その生徒にあった学習スタイルでわかる喜び、できる満足感を味わってほしい。

小学校期

パネリスト 後藤田 彰
(幕別小学校教諭)



管内で特別支援学級に在籍する児童が増えている。さまざまな状態の困り感の子がいる。今は診断名に関係なく困っているところでは支援している。

支援は、「みんなと一緒に」が良いと考える。人は人の中で育つと思う。必要なときに必要なサポートができればよい。最も大切なのは子どもを理解することに全力を尽くすことである。その子の基本的な特徴をつかむため検査も重要。

支援の第一歩は、子どもの声を聞くこと。子どもの声が聞こえたならそれがスタートだと考える。

特別支援学級：障害の程度が比較的軽度でも、通常の学級では十分な教育効果を上げることが困難な児童生徒のために設置された学級で、児童生徒一人一人の障害の状況や特性に応じて指導・支援を行う。

幕別町ことばを育てる親の会

みんなでつないだ 30年

「しりたい ききたい しゃべりたい」



高校期

パネリスト 菊地 信二
(幕別高等学校教諭)



幕別高校では、毎年合格内定者の家庭に「保健カード」を送り、生徒の健康状態の把握に努めている。今年度からその中に発達障害をたずねる項目を入れた。全道でも初の試みである。入学式でも特別支援教育の取り組みを説明した。その結果、保護者から相談を受けることができた。

学校を離れると情報が途切れ、どこに助けを求めたらよいのか保護者も困ってしまう。幕別高校では、卒業後も支援しようと同窓会活動を通し、卒業生や同窓生と接点をつくり、社会参加のために同窓会と連携している。

最後に

アドバイザー 久保山 茂樹
(国立特別支援教育総合研究所)



「特別支援」というと抵抗があるかもしれないが、人は誰でも多かれ少なかれ支援を受けて、誰かに支えられながら生きている。

誰の力も借りず生きている人はいない。

頑張らせるのではなく、その子に合った

学びのスタイルがあると、幕別の先生たちは考えてくれている。小さなときからの支援、積み重ねを次につないでいくことが大切である。

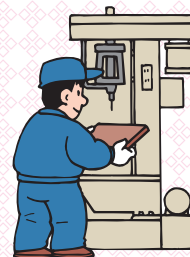


就労期

パネリスト 福井 紀郎
(帯広高等技術専門学院)



ものづくりに関心を持って積極的に入学してくる生徒が増えたが、「親に言われたから」という学生もいる。コミュニケーションに難しさを持つ学生もいる。保護者が環境づくりを求めることも必要。保護者から声を上げないと、現場が何を求めているかが分からない。子ども達のためにも声を出してほしい。



※ パネリスト等の顔写真は、十勝毎日新聞社提供